



七月の秀句

生の終り見えざる七月杉が立つ

寺田 京子

夏の日や薄苔つける木木の枝

芥川 龍之介

雲の峯もろにむらだち力満つ

石原 八束



池の底には純(もっぱ)ら金沙を以て地に布けり。四辺に階道あり。金銀瑠璃玻瓈をもて合成せり。
——『阿弥陀経』

目 次

おほん法話

- 心をこめて……………長谷川 昌 光……(2)
祖先への思いが子孫に生きる……………原 口 正 弘……(8)

=江戸物語=(6)

- 江戸の花町……………細 田 隆 善……(15)
——吉原と深川——

(木)(下)(隆)(一)(随)(筆)(集) <4>

- 海と山の狭間で……………木 下 隆 一 ……(28)
——現れる物、消える物——

◇◇長篇連載小説◇◇

- 立ち止まるな善導 第37回……………寺 内 大 吉……(35)
不老不死 挿絵 松濤 達文

表紙絵「蓮 池」 松浦春子画

おぼん法話

心をこめて



私は小学校一年の時から父の後についてお盆の棚経にまわりました。初めての法衣姿は恥ずかしい思いでしたが、檀家の方々から「えらいですネ」と言われるのがうれしかったし、

色々な家に行くことに興味もありました。お盆経はまだ覚えておりまんせでしたので、父の後にはただ黙って座っているだけでしたが、数軒回って行くうちに、「ノーマクサラバ……」

はせがわしょうこう
長谷川 昌 光

(横浜市光安寺住職)

私の知人のところでは毎年、亡くなったご主人の浴衣を精霊棚の横に出してお迎えをしております。心のこもったお迎えの仕方だと感心しております。この三日間、家族一同、心を合わせて先祖の諸霊位をお迎えしたいものです。

先日、知人の母親から電話で相談を受けたことがあります。

「突然電話で申し訳ありませんが……。」と形通りの挨拶につづいて、

「先生はお寺のご住職さんとのことです。お教えいただきたいと思ひまして、電話をさせていただきました。」

「息子がいつもお世話になりありがとうございます。息子から聞いていると思ひますが、あの子はどうも職場では何をやっても認めら

れず、うとんじられているようです。私もなにかと助言をしているのですが、どうもうまくいかないようです。」

彼は大学出の三十代半ば過ぎのサラリーマンで、早く父を亡くし、現在は母親と二人で暮しております。職場での人間関係がうまくいかず、仕事も思うようにはこばず、存在感がうすいという悩みを常々訴え、私はその都度相談にのり、励ましていたところでした。彼は毎日、職場での不満をすべて母親に話しているようです。そしてその都度、母親はあれこれと細かい指示をしているようでした。その内容を聞いておりますと、小中学生の子関係を思わせる程、共に親離れ、子離れしていない様子が話しのあちこちから伝わってきました。親子の関係が密接であることはすばらしいことですが、三十半ばを過ぎても精神的に一本立ちできない状態では、職場での

人間関係がうまくいかないのもなんとなくわかるような気がしてきました。

「こんな悩みを先日親戚の者に話しましたところ、『一度占い師さんに占ってもらったらどうでしょう』と、妹がかわりに行ってきてくれたのです。」

と言って、次のような相談をしてきたわけです。

「昨日、妹がその結果を知らせに来てくれたのですが、それによりますと、職場の人間関係がうまくいかないのも、お嫁さんが見つからず縁遠いのも、『先祖の供養がたりない』

『先祖に浮かばれない人がいて、苦しんでいる』ためだと言われました。こんなことがあるのでしょうか。ところで、このような場合はどのような供養をしたらよいのでしょうか。」

と、こういった内容のものでした。

「何か悩みや心配事を持って占ってもらえば、何の障りもありませんとは言わないでしょう。それらしい原因を言うのと違いますか。」

私はあなたが日頃どのようなに先祖の供養をなさっているか知りませんので、何とも申しあげられませんが、何か心あたりでもあるのですか。」

「私は毎日、お仏壇におまいりし、両彼岸やお盆の墓詣りも欠かしたことはありません。また、お寺さんの行事にもつとめて出席させていただくようにしております。ご先祖には私なりにご供養させていただいてはいるのですが……。」

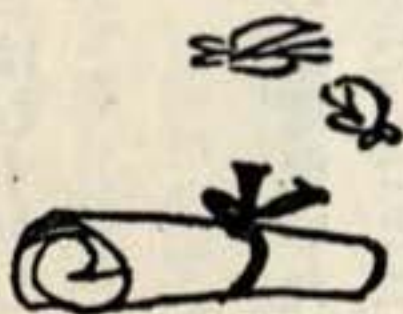
「それなら、気になさることはないでしょう。」

「でも、占い師さんの言葉が気になるのですか。……」

「占い師さんの言う通りだなと思われたら、

おぼん法話

祖先への思いが子孫に生きる



川の流れのように時は瞬時にも滞ることがない。世の中は以前にもまして急速に変わっていく。すべてのものが生成流転の中に身をまかせ、そして邂逅と別離のくり返しの中に

人は往来する。

梅雨のころに美しく咲に競っていた紫陽花あじさいの花はもう色褪せていまは見ない。紫陽花は日が経つにしたがって花色が変化するところ

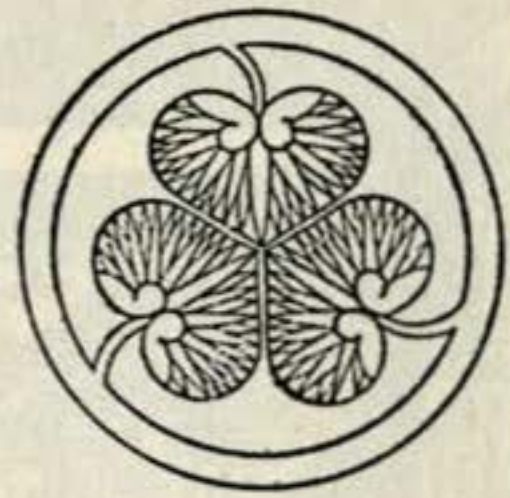
原はら口ぐち正しょう弘こう

◎“維持会員”へのご加入のお願い

法然上人鑽仰会は月刊誌『浄土』を刊行しながら、法然上人の教えを宣揚し、念仏信仰の実践をしまいいりました。すでに『浄土』誌は五十三巻に入り、鑽仰会創立以来五十五年をけみしてきました。近年は、弊会の活動も、『浄土』誌の刊行が唯一の務めというように、まことに細々とした微力な努力に終始している状態です。しかも雑誌の発行自体も不手際や遺漏の多い作業で、愛読して預いております会員諸兄には、まことに申し訳ないかぎりであります。しかしともかくも『浄土』の灯を消すことなく、遅々とした歩みではございますが、今後とも一步一步前進してまいりたく、担当のもの、一層の精進をお誓いいたすところです。

つきましては、「年会費 金二万円」のご助成をもって、弊会の維持会員として月刊『浄土』刊行に暖かいご支援を賜わりたく、ここに心よりお願い申し上げます。

法然上人鑽仰会



江戸物語

(6)

江戸の花町

— 吉原と深川 —

細^{ほそ}田^だ隆^{りゅう}善^{ぜん}

(俳号・豊明)

江戸の人口の特色は、(一)世界一の大人口、(二)半数は武家関係の人口、(三)大部分は消費人口、(四)大名豪商が多く、さらに、(五)女性より男性人口が多いことである。元文元年(一七三六)人別帳調査によると町人の人口比は、男六三%、女三七%である。地方からの出稼ぎと無宿人は多くは男性であるが、これには入っていない。幕末の弘化元年(一八四四)になってようやく男五二%、女四八%となった。武家の人口は明らかでないが、男がより多

江戸は全国総城下町
江戸は世界一の人口
江戸は日本の縮図
江戸で日本の富の半ばが消費
江戸文化の出現

く占めていた。この男性が多いことは江戸の花町の繁昌した理由であり、日本の富の半ばが江戸で消費され、大



——深川花町土橋の娼妓

軽子(供)に夜具を持たせ、障子穴から客を覗く

(菊磨画) ——

五月書房選書

大正大学学長・文学博士
全日本煎茶道連盟顧問
装道きもの学院非常勤講師

安居香山 著

正坐の文化

◆煎茶道の文化とその思想◆

■永年にわたり書きためてきた、煎茶道・着物・花・正坐論を一冊にまとめ著者の日本の伝統文化観をここに開陳する。是非ご愛読下さいますようご案内申し上げます。

●推薦します●

黄 檗 宗 管 長

全日本煎茶道連盟会長

村 瀬 玄 妙 貌 下

装道きもの学院 理事長

装道礼法学院

山 中 典 士 先 生

■内容

一章 正坐の文化

二章 煎茶道の歴史と思想

三章 売茶翁に学ぶ

四章 茶道小論

五章 茶と旅

六章 茶事漫筆

■体裁

四六判／上製／口絵二頁 定価一、六〇〇円（〒二五〇円）

五 月 書 店

〒101 東京都千代田区猿樂町二一六―五

電話 〇三―二三三―四一六一

振替 東京九一三三九四三

取引銀行 三菱銀行神保町支店

当座番号九〇一二四六三

海と山の狭間で

—現れる物、消える物—

木^{きの}
下^{した}
隆^{りゅう}
一^{いち}

書名も著者の名前も忘れたが、ある本に、「雑草という言い方はけしかなん。人それぞれに人格があるように、どんな草にも草格というものがある。十把一絡げに雑草と呼ぶのは、人間の思い上がりではないだろうか」という意味の事が書かれていたのを思い出しながら、庭一面にはびこった雑草を眺めて、いま半ば諦めの境地に立っている。一雨毎にといった悠長なものではなく、日一日、目に見えて雑草は逞しくなっていく。人間が半端な

「ではお前は誰からそんな話を聞き出したの」

「算術博士です」

「算術博士……」

突差には思いあたらないようであった。

「主簿の駱賓王です」

「ああ、あの無類詩人か」

落胆した表情になる。

主簿とは、文書を管理する属吏で重要な地位ではない。江南出身のこの放浪詩人は、いつのまにか長安の宮廷へはいりこんだ。無類の博覧強記、東西の学に通じていた。算術博士と呼ばれたほどで、計数に明るかった。詩を巧みに詠んだが、加減乗除をふんだんに駆使したものが多かった。

三条九陌麗城隈

万戸千門平旦開

小堂綺帳三千万

大道青樓十二重

後世になって「初唐詩壇の四傑」にかぞえ

られた。ちなみに四傑とは盧照隣、王勃、楊炯とこの駱賓王で、盧と駱とは五言詩のほか七言詩も作り、続く李白や杜甫の盛唐時代の基礎固めをしたと言われる。

だが、その博識万能ぶりがかえって宮廷人たちの軽侮を招いた。

「いずれ狂詩とも、飛語ともつかないものを言いふらしているのでしょう」

天后も相手にしなかった。こんな軽薄な男が陰謀の根源とあっては全身で緊張なぞするのではなかった、と落胆する。

翌朝、ただちに長安城入りをすることを供奉の者たちに命じた。

離宮での最後の夜、天后は王徐明を寢室へ招き入れた。当分のお別れ、と口走りながら激しく若い方士の身体を抱きしめた。明日、長安城へ入ればそこには夫の高宗皇帝がいるからである。

「こんどは貴郎のために新しく道観を造ってあげます」

すらすらと言ひ逃がれた。かねて天后と打ち合わせ済みだったのだ。正諫大夫とは厭勝師の明崇儼である。彼は未だ洛陽に居残っている。

「やはりあの男か」

老詩人は何度もうなずきをくり返した。

「徐先生、たいへん有難うございました。勉強になりました」

天子李賢は立ち上がると、深々と叩頭した。高宗皇帝までが微笑のなかで黙礼を与えている。

たったこれだけのことを訊くためにみんなは集ったのであろうか。

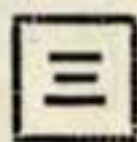
少年憚良は不審でならなかった。

首実験かもしれない、と東宮御所を出て王

徐明と別れたあとになって気づいた。

高宗たちは方士徐明の顔を知らない。近ごろどうやら則天武后の愛人の椅子に坐りこんだらしい若者はどんな男であるか。そんな意図にもとずいた呼び出し、としか思えなかつ

た。



情報は長安城内を疾風となって翔けめぐり。とりわけ天后が張った情報の受信網は感度が鋭敏だった。それがあったからこそ則天武后は現在の地位までのしあがれたのである。

王徐明が高宗たちと会った翌朝、少年憚良が呼びにきた。

「東苑で天后がお待ちです。急いで来て下さい」

「東苑だと……」

王徐明は小首をかしげた。そこは東宮御所の庭で、広い草苑ではあったが逢曳の場所としてはおよそ似つかわしくなかった。皇太子の召仕たちは言わずもがな、近ごろでは高宗皇帝もこの御所に住みついてしまったため、

◎読者の皆様へのお願

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもありますが、誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、宜しくご協力下さいませ。

- 一、内容 自由（生活の「コマ」や我感あるいは思うことなどをエッセイ風におま）とめ下さい。
- 一、枚数 四百字詰用紙六～九枚程度
- 一、締切 毎月五日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 五十三巻 七月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

昭和六十二年六月二十五日 印刷

昭和六十二年七月一日 発行

編集人 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷所 長谷川印刷

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒103 振替東京八一八二一八七番

住職待望の回向文集ができました

新 諷 誦 撰

編集 白金ブディストクラブ

監修 竹中信常 大室了皓 山本康彦

装丁 豪華クロス張り コンパクトサイズ

(タテ 十九・三センチ ヨコ 八・二センチ)

内容 諷誦文 十編 下炬文 二編

定価 二〇〇〇円 (送料別)

(申し込み先)

〒一四一 東京都品川区上大崎一―九―一

戒法寺内 白金ブディストクラブ

TEL 〇三(四四一)八九七一

FAX 〇三(四四一)八七〇二



第五十三巻 七月号

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和六十二年六月二十五日印刷 昭和六十二年七月一日発行